「HSK 季刊わたぼうし」 第36号

発行者:わたぼうし連絡会

発行日:1995年(平成7年)3月27日 '95 春号

第36号のテーマ　創刊10周年記念号

ハクション　春が来ました　花粉症

作：比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## 特集・「HSK季刊わたぼうし」創刊10周年

### 発刊10周年を迎えて　　編集委員・（わたぼうし連絡会会長）

私が「HSK季刊わたぼうし」の編集委員をすることになったきっかけは、昭和58年に七尾市で開催された「わたぼうしコンサート」で実行委員をさせてもらったことです。コンサート終了後、前年に行われた同コンサートの実行委員会と何か継続して活動できる活動をしようと話し合い、当時の「わたぼうし新聞」を発刊したものと記憶しております。

時の流れは本当に早いもので、もう10年も経ったのかと感慨深いものを感じています。思い起こせば、五体満足で少々の知識は持っていたつもりの私でしたが、活動を続けているうちに、自分の思っていたことと現実の違いに改めて無知さを知りました。

また、この機関紙活動を通して、いろいろなことを知り、様々な勉強ができ、更にはたくさんの人と知り合うことができて、とっても幸せだと思っています。

本紙も10年の間に、読者の皆さんに対し時には疑問を投げかけたり、あるいはホットな話題を提供させていただいたり、とできるだけ充実した内容で発刊できるよう心がけてきたつもりですが、皆さんいかがでしたでしょうか?

最後に、この機関紙は編集委員だけが作ってきたものではなく、読者の皆さんと共に作り上げてきたものだと思っていますし、今後も益々幅広い皆さんのご協力のもと、末長く続けていけるものと確信してやみません。

もちろん、微力ながら私も自分なりに今まで以上に頑張りたいと思いを新たにしていますのでどうぞよろしくお願いします。

### 「わたぼうし」10周年に寄せて

「富山生きる場センター」職員：HSK事務局

先日、Oさんに「私どもの生きる場センター10周年に寄せて何か書いて!」とお願いしたところ、「わたぼうしも10年なので何か書いて!!」と逆に依頼され、この原稿を書いている次第です

私と「わたぼうし」との出会いの1つは、パソコン通信です。センターのネット局「LEVE」が'92年に開局し、そこで知り合いになりました。そしてセンターへEさん、Oさん、Kさんが遊びに来られました。そしてOさん、Eさんにはセンターで請けた出版会社の文字入力の仕事をしていただいています。そしてこうしてお互いに10周年のエールを交わしています。本当に出会いというものは不思議なものですね。

もう一つの出会いは、HSKです。郵便料金の値上げで財政負担が大きくなっていた時、HSKという定期刊行物のグループを創りました。「わたぼうしもいっしょにやりませんか」と声を掛けたところ、是非ということになり、「わたぼうし」の編集委員の方々と顔を合わせることができました。約半年間面倒な書類の準備をしていただき、やっと低料第三種郵便物の認可を受けることができました。当初はじめた5団体はやはり一番大変な思いを

共にしたという実感があります。そして今、その輪が着実に広がっています。
『わたぼうし」‥‥私は、10年間でいろんな形で蒔いてきたメンバーの方々の情熱という「種」が、「わたぼうし」のメール(機関紙)に乗って(載って)、いろんなところに落ちて、少しずつ根付き、また「花」を咲かせるのだろうと思います。
今後も、「わたぼうし」を待っている人へ届け続けて欲しいと思います。お互いに頑張りましょう!

## 事務局裏話　　事務局M.M

「エーッ、もう十年」って感じです。
事務局の裏話？何が大変って、会計のやりくりと封筒詰めです。
「HSK季刊わたぼうし」が発送されるまでを少しお話しすることにします。
まず編集会議なるものが終わり、二週間ほどで校正された原稿が送られてきます。そこでカットを入れ、ここまでは編集委員の手で、印刷だけは業者にお願いします。印刷ができてくる間に宛名ラベル貼りと事務局の住所のスタンプ押し、次ぎに上部三分の一を開封します。これは昨年10月より第三種郵便の認可が下りたため、この作業が加わりました。ここまでが第一ラウンド、印刷ができてきました。ドーッと1200枚。第二ラウンドの開始。三種類の三枚一組ですから順序よく三つの山に分けて置き、上から一枚ずつ取って二つ折りにしてゆきます。その工程が終わって今度は四つ折りにして封筒に詰め糊付けです。このように書くと、いとも簡単に思えますが、一週間位かかります。夜だけの作業ですから、その間我が家の八畳は使用不能、「HSK季刊わたぼうし」が大きな顔をして占領します。運悪くこのような時友だちが訪れると、手伝わされるはめになります。それに強力な助っ人がいます。年齢は84歳。私の母です。娘を見るに見かねて手伝ってくれるのです。いや、部屋が片づかないからでしょうか。何にしても根気がいいんだなこれが‥‥。かくしてようやく発送になります。
第三種郵便料金となり会計のやりくりもずいぶんと楽になり、この分だともう少し続けられるかなと思っています。

## 「わたぼうし」と10年　　障害者支援施設利用者・編集委員

昭和56年10月11日(日)、羽咋市の石川県体育館で開かれた北陸で初の「わたぼうしコンサート」を見に行きました。
誰かが見つけたわたぼうし　ふーっと息をごらん　風に吹かれて飛んでいった　ふんわり ふわふわ　ふんわり ふわふわ　のテーマソングに乗って幕が開いたあの感動は忘れません。
「わたぼうしコンサート」とは、障害者の書いた詩にフォークソングのメロディーをつけて発表するもので、奈良県にある障害者の自立施設「奈良たんぽぽの家」から生まれ、

国内はもちろん、海外の各地でこのコンサートが開かれています。
　その翌年から、松任市、七尾市と3年続けて「わたぼうしコンサート」が行われました。私は何かの形で3回とも参加させていただきました。
　私が「HSK季刊わたぼうし」とかかわったのは、昭和58年に施設を出て、自宅で和文タイプを買って何でも打っていたのですが、目的もなく打っていても、つまらなかったので羽咋の「わたぼうし会」というサークルに入り、サークルの機関紙「わたぼうし通信」を打たせてもらったのです。
　この機関紙を打っていたら、コンサートは一時的なもので終わるが、新聞という形を取れば家にいても、施設に入所していても、健常者も障害者も紙面を通じて交流ができるのではないかと思い、「わたぼうし会」の皆さんに相談しましたら、会長さんがやろうと言い、準備期間は3ヶ月で知り合いから原稿をいただいて、創刊号を昭和60年の1月に発行しました。それから、現在までさまざまなテーマを設けて年に3～4回発行してきました。
　10年間でいろんな問題に直面し、教えられました。読者からお叱りを受け、いろいろ指導をいただせきました。
　平成3年10月に石川県において開かれた第27回全国身体障害者スポーツ大会「ほほえみの石川大会」のパソコン通信サービスに参加したことにより、たくさんの仲間と出会い、この「HSK季刊わたぼうし」の編集をワープロからパソコンへ変わるきっかけになりました。私がパソコンを覚えようとしなかったのは、パソコンでは文字はガタガタであるというイメージがあり、機関紙作りには向いていないと思っていたからです。しかし、最近のソフトはアウトラインがついており、大きな文字も美しく印刷されることがわかり、パソコンのラジオ講座で勉強しながら、どのソフトが「HSK季刊わたぼうし」に向いているかを研究していました。応援してね。
　私にとって「HSK季刊わたぼうし」は、人生を大きく変えてくれた大切な機関紙です。体の続く限り、パソコンに向かってこの「HSK季刊わたぼうし」の編集を続けようと思っています。私にとってこの機関紙の編集が生き甲斐になっています。

## 読者の声から
## 「わたぼうし」創刊10周年を迎えて　　「青山彩光苑」苑長

　「わたぼうし」創刊10周年おめでとうございます。
　「わたぼうし」が障害のある人、ない人が自由にそれぞれの意見を出し合い、お互いに理解し合う場として、10年間頑張ってこられたことは誠に素晴らしいことだと思います。今回に至るまでには多くの困難やご苦労があったことだと思い、編集に携わった方々の努力に深く敬意を表す次第です。当青山彩光苑が開設以来10年になりました。10年間共に歩んできた仲間として喜びにたえません。
　どうか、これからも障害のある人、ない人の架け橋として意義ある活動を続けられ、ますます発展されることを期待して、私の御祝いの言葉といたします。本当におめでとうございます。

## 新聞発刊10周年を迎えて　　地域住民・肢体障害

私が「わたぼうし会」に入れていただいたのは昭和58年の秋ですが、新聞が発行されるようになったのは、昭和60年1月29日からと書きとどめられ、全部綴じてもある。が、こうして続けられたのは、編集者の方々と原稿を書く人たちとの協力があったからではないかと思う。私自身(依頼されたことも含め)時折載せていただいてもおりますが、書かせてもらった者にとってもうれしいことです。

あれから10年になろうとは、ふと月日の流れを思うとともに思い出すのは、私事ではありますが、この会のことを中日新聞の発言版、テーマ特集「ボランティア活動」に投稿し、運良く掲載されたことです。時は9年前『心が安らぐわたぼうし会』という題で(下の文は、その一部を書き写したものです)文集(ひなたぼっこ「3号」まで作られている)にとどまらず､昨年からは福祉問題を含めた幅広い問題の新聞も発行されるようになりました。

あまり外に出ることのない者にとって、この会は心のボランティアとも言える会だと私は思っています。そして送られてくる新聞は、いつも楽しく読んでいます。目立たない小さい会かもしれないが、心を安らかにしてくれるこの会を、私はいつまでも大切にしたいと思っています。と、いう内容で書いたものです。が、活字で載った当時の記事は、切り抜かれ一冊のアルバムに貼ってもあり、いい思い出になっています。以来、私は今、わたぼうし会、への気持ちは、(9年前と)変わってはおらず、これからも、いろいろなテーマを交えた「HSK季刊わたぼうし」の発行が続くことを願って結びとさせていただきます。

## 私の「わたぼうし」10年　　地域住民・公務員

私は現在、公共職業安定所(ハローワーク)に勤務しており、会社の方の雇用に関する相談や、高年齢者や障害を持つ人たちの職業相談を行っています。特に何のことはない、ただの公務員ですが､「わたぼうしコンサート」との出会いが、今もって私の人格と仕事に影響を与え続けているのです。

あれは昭和58年だったでしょうか、当時羽咋市の青年たちが取り組んだ「わたぼうしコンサート」が、松任市の青年に引き継がれ、そして七尾市に引き継がれることになりました。その時私は七尾市で青年団活動に没頭しており、市内の青年団でこのコンサートを実施することから、私もそのメンバーの一員としてコンサート作りに参画することになりました。私はそれまで音楽を聞くことはあってもコンサートを運営することなどは全くの素人、まして障害を持つ人たちとは接したこともなく、準備を進める中で何もかもが雲を掴むような毎日でした。

さまざまな苦労を経てコンサートは一応無事終了しました。コンサートというイベント自体の反省も多くありましたが、同時に障害を持つ人たちとの接点の持ち方についても色々と反省すべきことがその後の話し合いで出されたように思います。

そして、私自身にとっても3つの大きな転機がありました。

まず一つは、聴覚障害の方にもコンサートを楽しんでもらうために行った「手話」を私

自身が習うきっかけが出来たことです。コンサート以降手話講習会に参加し、わずかながら手話による会話が出来るようになりました。当時は特に感じていませんでしたが、その時覚えた手話が現在私自身の仕事においても活用する機会があるわけです。大事な話は筆談になりますが、それでもわずかばかりの手話での会話は障害を持つ人たちにソフトな印象を与えるのではないかと思っています。

次ぎに、私自身が障害を持つ人たちとの付き合い方を学んだことです。それまでは障害を持つ人たちに対しては、何でもしてあげなければという考えを持っていましたが、実はそうではなく、困っていることや出来ないことに対して力を貸してあげることが大切だということを教えてもらいました。

そしてもう一つはこのコンサートを通じてボランティアという言葉の意味を知り、全国ボランティア集会の運営スタッフなども経験する中で、私が取り組んでいた地域づくり運動は、青年たちだけで考えるのではなく、地域のいろんな人たちと共に考えていくことが必要だということを教えてもらったことでした。

つまり、地域づくりは福祉の分野に携わる人や、地域活動に携わる人、その他さまざまな考えを持つ人たちと共に進めていくことが最も大切であるという、今思うと何でもないことだけれど、このことがこのコンサート以降10年を経て、私が実感として身につけたものでした。

当時は深く考えもせず、単に無我夢中で取り組んだ「わたぼうしコンサート」、このコンサートや当時出会った人たちが今の私を大きく成長させてくれました。紙面を通じて深く感謝申し上げますとともに、ご迷惑をかけた方々、またそれ以降にご無沙汰している方々に心からお詫びを申し上げる次第です。

現在私は車いすの青年の就職探しをはじめ、多くの障害を持つ人たちの職場さがしに奔走していますが、私にとってのわたぼうし10年は、これからもきっと20年、30年と続いていくものと思います。

## 既刊号より

ここには、昭和60年発行の創刊号と2号より抜粋して投稿原稿を掲載します。

### 「わたぼうし新聞」創刊号(1985年1月発行)

### 施設職員だった頃をふりかえり　　地域住民・会社員

僕はかってある施設で働いたことがあります。今当時のことをふりかえり反省させられることがあります。そのきっかけになったのは、地域でアパートを借りて生活している障害者の人たちの介護や、「ひまわり教室」(心身障害児通園施設)に勤めるようになってからです。

反省点として感じるのは、僕がいかに管理的であったかということです。介護や「ひま

わり教室」の介護を通して、障害者の声をじっくり聴くこと、決して先回りして答えを出さないこと。こちらの考えを押しつけないこと。障害者の心にそった言動をとること、大まかにいって以上のようなことが当時の僕に欠落していたように思います。それらを一言でいうと、障害者の人権を尊重することになるでしょうか。

とにかく、共に生きていくという視点が職員の発想の段階から抜け落ちていたなあ、ということを思うとき、自分の犯した過ちの大きさに慄然としています。せめてこれからは、そういうことのないように生きて行きたいと思います。

## テレビニュースの取材から　　ＮＨＫキャスター　第2号(1985年3月発行)

この原稿内容は、昭和60年2月13日にNHKの夕方のローカルニュース番組「かがのと630」で放送されました。石川県金沢市富樫小学校と県立ろう学校の児童生徒の交流の様子を取材された630キャスターKさんに原稿をいただきました。

たった3日間の取材でしたが、子供たちの交流は私の中に「障害を持つ」現実の重さと、その中で何か明るい希望のようなものを残してくれました。その一部を書かせていただこうと思います。

私達が暮らす社会そのものが、健常者、身障者が一緒に暮らしている中で、今の子供たちは思いやりがない、などと言われます。本当にそうでしょうか?障害や何らかのハンディキャップを持つ友だちがいないという環境を、子供たちは与えられています。「お年寄りやハンディを持つ人を見かけたら、何か助けてあげましょう。」と聞かされた子供たちは、いざ実際に目のあたりに接したときに「どうしていいのか、わからない」というのが本当のところかもしれません。

せいぜい席を譲るぐらいのことしか具体例を習っていなければ、それをどうすればよいのかと思う子供ですから‥‥。「思いやり」というのは、教え習うもの、育てて行くものだと痛感しました。子供たちを一緒にすれば、自然に互いのハンディを超えようと懸命になる。大人の私の中にあった「気兼ね」を恥ずかしいと思いました。身近に接することによって、互いを思う気持ちが育まれていっていたようでした。

しかし、現場の先生方の実践としては、(ろうの子供たちの場合)コミュニケーションに必要な充分な発声、読み取りは、やはり特別な時間を割かなければならず、授業そのものを一緒にした場合は、劣等感、優越感という逆の効果をもたらしかねないということでした。

盲、ろう、養護の共通の哀しみは、家に帰るとその地域に学校の友達がおらず、地域への解け込みをいっそう困難にしていると思いました。学校単位の交流では、健常児にも、障害児にも(一緒に生活していくという点では)一緒に地域社会で生きていく上では、先に書いた原因が、なお考えられるべきではないかと思っています。

## 電波で全国へ

ここからは、「HSK季刊わたぼうし」をNHK大阪放送局製作のラジオ第2放送の福祉番組「心身障害者とともに」に毎号送付していますが、その中で全国放送された記事を掲載します。

## 介護とは「病院ケースワーカの立場より」

**地域住民・病院ケースワーカ**(1988年11月発行第13号に掲載)

現在のところ私は介護する側にいますが、もし自分が介護される側となった場合のことを考えると、介護されることを極当たり前のこととして受けとめながら生きていけるような援助をして欲しいと思います。もちろん介護されることを慣れてしまい、何もかも人任せでやる気がないのも困ります。

しかし、私は病院で働き始めて障害者となった患者さんから、家族に迷惑がかかるから家に帰りたくない。看護婦さんに申し訳ないからナースコールを押せないという話を聞くことが多く、介護される側の人にそういう気持ちを持たせることが果たして本当に介護といえるるのだろうかと思うのです。障害者となり自分で身の回りのことを自分でできなくなること、人の援助がなくては生きていけないということは人によっては非常に屈辱的な思いを伴うものであると思います。そういう人たちに対して障害を受け入れ、さらに生きていく意欲が出るように非日常的な介護のなかで援助していく必要があると思います。

では、介護する側としてどのような態度で介護にあたるのが望ましいのでしょうか。学生の頃に実習させてもらった施設では、職員は皆「お世話させてもらっている」という気持ちを持ちながら教務を行っているという話でした。そこまでいくと私には無理があるような気がします。そんなに構える必要はないのです。介護される側の気持ちを思いやらず傷つけるような言論はもちろんのこと、同情心や慈善的な考えを持つのも同じくらい問題だと思います。介護される人が自然に受けられるようにもっと気軽に援助していきたいと思っています。ただ、この「自然に」というのが一番難しいのですが。

## 改良して、自動販売機　　地域住民・肢体障害(1991年9月発行、第20号に掲載)

今、私たちの周囲には、身近な存在ジュースやお酒から食料品、衣類、生理具、切符や各種カードの販売機まで、さまざまな自動販売機があります。それは生活の一部となっています。

しかし、私たち障害者が日常生活していて不都合を感じるところ、ここを改良・工夫すれば、もっと便利になると思う点も数多くあります。

例えば、私など肢体不自由者の場合には、今の両替機や自動販売機の多くが、せまい硬貨の投入口なので、なかなか硬貨を入れることが難しく、容易に投入することができなくて、難渋することが多いです。

また、その取り付け位置も高く、車いすでは使用しにくいです。それに、不自然な姿勢

でビンなどを取り出さなくてはならないのです。
　そこで、私は現在ある各種の自動販売機や公衆電話の硬貨の投入口なども、ロート形や十文字にするなどの簡単な改良によって、私のような手の不自由な人でも、ずいぶん容易に使用できるようになると思います。
　それからテレホンカードや各種のカードを使用していて感じることですが、使用後に返却口から出るカードの先端が少しなので、手先の不自由な私などは、なかなか取り出せなくて苦労します。
　そこで、手の不自由な人でも簡単にカードの出し入れがしやすいように、カードの頭部がもう少し出るように工夫していただきたいと思います。
　また、各種の自動販売機に点字の表示や販売品を音声で知らせるなど、ちょっとした工夫をすることで、盲人などの人なども簡単に使えるようになります。
　このような簡単な改善や改良をすることで、私たち障害者にとっても自動販売機は、より便利で使用しやすいものになるのではないでしょうか。

## 障害者と施設　地域住民・肢体障害(1994年1月発行、第32号に掲載)

「障害者と施設」というテーマを与えられ、施設のことは何も知らないので困りました。そこで障害者の一番関心ごと職業について考えながら、それに関する施設のことも感じたまま少し書かせてもらいます。
　私は子供の頃から漫画家になるのが夢でした。でも、それはあくまでも夢であり、そんなに簡単になれるものでないことも知っていたので、まずは自立のための職業を、と考えました。それで石川整枝学園を卒業後、職業訓練所へ入所を希望。でも私の障害が重く、日常生活で人の助けがいるため入れませんでした。当時は授産所のような施設もありません。その後私が漫画家を目指して励むようになったのは、他に仕方がなかったからです。
　ところでその職業訓練所ですが、最近はせっかく技術を習い卒業しても、それを生かす職場自体が減っていて、仕事に就けない人が多いと聞きます。企業がもっと一般の事務などに採用してくれるといいのですが、まだまだです。
　訓練所にも入れない重い障害のある人の職業は本当に少ないです。授産所にしても、生産額よりもそれ以上のコストがかかっている所がほとんどだといいます。利益を上げるのが仕事の目的だとするとつらいですが、だいたい重度障害者の仕事をお金に換算して健常者と比べる方が間違いかもしれません。私は重度障害者の仕事はお金に換算できない仕事がいいのでは、と思ったりします。例えば点字の本を作るとか、施設のお年寄りや保育園の子どもたちの話し相手や遊び相手になるとか、ボランティアに近い仕事ですが、いろいろあるはずです。もちろん、これには公的な施設と援助が必要ですが。
　私は運よく漫画家になれました。あまり売れない漫画家で家計は大変ですが、それでも仕事のできる幸せを感謝しています。
　私の場合が誰にも当てはまるわけではないですが、でも、人は自分の望んだ一番近いものになるという言葉があります。目の見えない弁護士や画家や歌手。車いすの科学者や小

説家もいました。障害者だからこそ夢が必要なのです。これからの若い障害者たちも夢を持って頑張ってほしいです。夢は挫折するかもしれませんが、目指して過程で得るものは大きいと思います。そして養護学校などでは、できるだけ早い時期にその子の得意なものを見つけ、それを伸ばす助けをしてもらいたいです。

障害者と職業を考えるとき、私はすごくショックを受けた記憶があります。

今から30年近い前、金沢で障害者に関する全国大会がありました。私も誘われて出かけ、障害者と職業をテーマにした討論会を見学しました。話し合いの中で施設の職員らしい人が「寝たきりで手も不自由な障害者には、寝返りごとに背中で機械のボタンを押す仕事はどうか」と発言しました。私は唖然として、やがて腹が立ってきました。寝返りごとに背中でボタンを押す人を想像してゾッとしました。そんなものが仕事と呼べるだろうか。そうまでして仕事をしなければならないものか。

日本では仕事に対して特別な思い入れがあり、仕事が一番。仕事のためならたいがいのことが許され、自分も犠牲を支払います。人は仕事で評価され、働かないものは、ひどいときには、「ゴクつぶし」とまで言われます。こういう社会で生きる障害者はつらいです。

確かに働くことは立派なことです。私は障害者がひとりでも多く職に就ける社会であるよう望みますが、でも「できなければ、できないでいいんだよ、のんびりやりなさい」と言ってくれる、ゆとりある社会であってほしいと思うのです。

## 団体紹介コーナー羽咋わたぼうし会　　（創刊号に掲載）

1981年に日本海側で初の「わたぼうしコンサート」が羽咋で開かれました。「わたぼうしコンサート」とは障害を持つ人たちが書いた詩にフォークソングのメロディーをつけて歌うコンサートです。

県内では1982年には松任、翌83年には七尾で行われましたので、知ってる方も多いと思います。

「羽咋わたぼうし会」は、コンサートを企画した人、参加した人、見に来られた人等、有志によって、このつながりを大きく、広くという願を持って作られた会です。

過去に障害を持つ人たち、健常者との合同ハイキング、キャンプ、クリスマスパーティー、車いすのマップの、予備調査等をやってきました。

## これからの原稿募集テーマについて

・家族　（父の思い出、母の思い出）

・私の介護体験（家族、施設での介護、行事、イベント等での介護体験を募集します。）

## 編集後記

春の足音が聞こえてまいりました。皆さん、いかがでしょうか。

1月17日におきました「阪神大震災」は、多くの犠牲者が出てしまいました。被害にあわれた方々には心よりお見舞い申し上げます。

しかし、テレビの報道を見ていますと、こんな時こそ、人の温かさを感じます。本当に大切なものが見えてくると思います。

当機関紙もこの報道について、新聞、テレビ福祉番組、パソコン通信の情報から編集し、次号で特集を組みたいと思っております。

また、皆さんのご意見、感想をお待ちしております。　(Z.O)

## お詫び

冬号の編集委員の都合で発行が遅れ、皆様にご迷惑をかけたことをお詫びします。春号は早期の送付を目指して現在、編集中です。

## NO.37は障害者と阪神大震災